



国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は十九ページまである。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
9. 解答用紙は持ちかえらないこと。
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. この試験時間は六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	

(一) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

「責任」という言葉は、往々にして大声で唱えられる。責任とは、ある事態を惹き起こす原因となる行為をなした者として、その結果に対して「咎」がある、したがってなんらかの「責め」を引き受けさせられるということである。「咎」を認めてみずから「責任」をとる場合ももちろんあるが、たいていは他者から指摘されて、あるいは判定されて、とらされるものである。とりわけ、あるのつぎきならぬ事態を前にして、それを惹き起こした原因となる行為がにわかには突き止めがたいとき、それはそれにかかわった特定のひとへの性急な責任追及になりがちである。だれも責任をとらない政治や、不正をくり返す企業へのひとびとの苛立ちが、たとえば謝罪会見という名の「責任追及」の儀式を厳しいものにするのがしばしばあるのは、よく知られていることである。責任の所在が複雑で見えにくいこと、あるいは責任を逸らす言辞の蔓延。そうした状況のなかで、ひとびとの苛立ちが飽和状態にいたる。だれかが責任をとるよりほかなくなるのである。

そういう空気が支配しているところでは、ひとは、果てしないバッシングや追撃を怖れて、自分が責められないようあらかじめ手を打つことにやつきになる……。

ここに三者三様のひとたちがいる。

まずは、五木寛之さんと香山リカさんの対談『鬱の力』のなかに出てくる患者の話。香山さんが精神科医になつたばかりの頃は、「うつ病」だと診断書に書かないでくれとよく患者さんに言われて困った。ところが最近は「うつ病」だと書いてほしいという患者さんが増えて困っているというのだ。「うつの、ですね」と言っても、「いえ、うつ病なんです」と言ってきた患者さんもあるという。「うつ病」と「鬱な気分」とがごっちゃにされている、と。

「あなたの場合は、うつ病と捉えなくても結構です。こういう悲しい出来事があつたら、しばらく落ち込むのは当然ですから、時間が経てばちゃんと回復できますよ」と言っても、安心せず、逆に「じゃあ、私のこの気分は、いったいなんなんですか」と言い返される始末。「病気じゃない」と言われても、当人は納得しないのだ。

なぜか。香山さんの理解はこうである——「ただの『鬱気分です』って言われてしまったら、あとは自分の考え方とか生き方とかに直面して、自分で取り組まなければいけない課題になってしまふ。でも『うつ病』ということになれば、病人なんだから『お任せします』と言えば済む。

A

の立場で手当てされたい、ケアされたい、流行り言葉でいえば『癒されたい』ということもあると思うんです」。

何をやってもうまくゆかない、なんか状況が塞いだままそこからうまく抜けだせないといったとき、ひとはその理由を知りたいと必死に思う。が、鬱ふさぎの理由というのはそうかんたんに見つかるものではない。けれども、解決されないままこの鬱ふさいだ時間をくぐり抜けるのもしんどい……。ということになれば、多くのひとが、自分のこの鬱ふさぎを説明してくれる「物語」があればすぐにそれに飛びつくというのは、見やすい道理である。わたしがいまこうでしかありえないのは、あのときあんな体験を強いられたからだ、出生をめぐるこういう状況があったからだ。そう、いま自分がこうでしかありえないのは自分のせいではない、あの「事件」が自分にこうした鬱ふさぎを強いているのだ……。というわけである。「トラウマ」や「アダルトチルドレン」という言葉はそういうふうに使われた。

しんどさを自分の問題として引き受けるのではなく、自分が引き受けさせられている問題として受けとめる。「わたしが悪いのではない」「すぐに少しでも楽になりたい」、そんな気持ちはどこかできつと働きたしているのだろう。たしかに自分の鬱ふさぎが病気に起因する、あるいはわたしが過去に受けたひどい仕打ちに起因すると考えれば、楽になれる。「悪いのはわたしではない」のだから。

「悪いのはわたしではない」という、この切々とした、しかしちよつとわがままな訴えを「責任はわたしにはない」と言いかえれば、役人の逃げ口上となる。延々と弁解をつづけたり、逆に「遺憾に思います」と謝るふりしてじつは開きなおる役人。かれらの顔には「責任はわたしにはありません」と書いてある。責任がみずからにかららないようあらかじめ手を打つことにばかり、優れたその知性を用いているのではないかと勘ぐりたくなるような役人がたしかにいる。政治家もしばしば同じようにふるまう。ほんとうは「わたしが悪かった」と潔く言えるひとのほうがかえって信頼されるものなのに。

そして最後に、教育や医療といったソーシャル・サーヴィスの現場で、そのサーヴィスが滞ったり劣化したりしているように見えるとき、役所に猛烈な苦情や文句をぶつけるばかりで、

B

ことを考えもしない「クレーマー」たち。税金を、あるいはサーヴィスをちゃんと払っているのだから、わたしには落ち度はないというわけだ。「クレーマー」は他者の責任を問いつめるが、そのクレームが「もっと安心してシステムにぶら下がれるようにしてほしい」という受け身の要求であることに気づいていない。多くの市民も陰に陽にそうした意識に染まっている。自分たちのそばで起こった難事も、役所に苦情や文句をぶつけるばかりで、

C

ことを避けている。「問題」を自分の「課題」として引き受けるということをやっている。そんな親をまねて

か、この頃の学校では、授業がつまらないと、こましくくれた生徒は「先生の教え方が悪い」とクレームをつけることも少なからしい。いずれにせよ、すぐに答えを求める気の短さと、責任を引き受けることから逃げて楽になりたいという気持ち。この二つのメンタリティがいつ頃からか、ひとびとのうちに平然と居座るようになった。

この三つ、脈絡はばらばらである。が、見ようによつてはほとんど同じである。「D ……」と言いうるポジションをとろうという目論見である。右の三者、いずれも進んで責任をとろうとは考えない。

もはや旧聞に属することと言ってもよいが、米国のオバマ大統領がその就任演説の最後のところで、「新しい責任の時代」というスローガンを口にし、「米国民一人ひとりが自身と自国、世界に義務を負うことを認識し、その義務をいやいや引き受けるのではなく喜んで掴みとること」を訴えた。

「責任」というこの言葉、英語ではリスポンシビリティ (responsibility) である。この語には、日本語の「責任」という言葉からは感じられない独特の含意がある。リスポンシビリティとは、文字どおりに訳せば、「リスpondする能力」、つまり他者からの求めや訴えに応じる用意があるということである。さらにそれをラテン語源に分解すれば「たれかからの約束に約束し返すこと」(respondere) という意味である。

日本語で「責任」と言えば、国家の一員としての責任、家族の一員としての責任というふうには、組織を構成する「一員」として果たさねばならないことがらを思い浮かべる。が、それは匿名の役柄における責任であつて、まぎれもなくこのわたしがいまだ

かから呼びかけられているという含みはない。これに対して欧米のひとたちは、伝統的に、ひととしての「責任」を、他者からの呼びかけ、あるいはうながしに応えるという視点からとらえてきた。この他者はかれらにとっては神でもありうる。だから職業のことを、とくに使命や天職の意味を込めて、コーリング(calling)と呼ぶことがある。まさに何かをするべく神から呼びだされているという感覚である。

考えようによつては、阪神淡路大震災のあと、空前のヴォランティア・ブームが起こったときにひとびとがとつさに抱いたのは、この、いま自分が呼びだされているという感覚ではなかったのかと思う。仮設の避難所に遠くから赴いたひとたちは、自分だけでも知らないちつぽけな存在だけれど、そして会社でもいつも何をやって「あたりまえ」、とくに評価されるわけではないけれど、ここでは「ああ、また来てくれたんやね」と、他とは違うこの「顔」として認められ、たどたどしいけれどもまぎれもなくこのわたしの言葉で話すことができる。ねぎらいあうことができる。そのとき、ひとびとがもしその動機を訊かれたら、「責任」という言葉はもちだしにくくても、「リスボンシビリティ」という言葉に対応する言葉が日本語にあれば、きつとそれで表現したことだろう。

I

もちろん、名ざしで呼びだされている者としての自分を意識することには、けつごう危うい面もある。他のだれでもなくこの自分が何者かからとくに召喚されているという意識が過大なまでにふくらんで、自分を他に優まさって囑望された人間、つまりはエリート(選良)と考へてうぬぼれてしまひもするからだ。あるいは逆に、つねに他人による評価と称賛を求め、ときに卑しいばかりに他人に取り入ろうとするからだ。

II

この点で、オルテガハイガセットによるエリーートの定義はふるっている。かれは言う。大衆とは「自分以外のいかなる審判にも自分をゆだねないことに慣れている」ひとであり、エリートとは「自分を超え、自分に優つた一つの規範に注目し、自らすすんでそれに奉仕するというやむにやまれぬ必然性を内にもっている」ひとである、と。そういえば、みずからの務めを「公僕」と称したひとたちがかつていた。他人の分まで責任を引き受け、黙していつさい弁明しない、そんな政治家や経営者がそれである。

III

ちなみに、カントという、原則を重視するドイツの哲学者は、このことを「なすべきであるがゆえになしうる」と表現する。何かをしようという主体の意志の方針がそのままいつも普遍的な正しさにつながるように行為しなければならぬというカントの主張は、「すべき」ことが「したい」ことであるという境地においてこそ、ひとは真の意味で幸福であるに値するものとなりうるという考えにいたりつく。

IV

これに対してヴォランテアという活動には、多くの人を一つの目標へと糾合する「べし」(原則にもとづく義務)というものがない。ここでは、だれかが一枚の正確な青写真を描いて、それを軸に全員が結集するというやり方をとらない。それでも、集ったひとたちのゆるやかなイメージの交換と調整のなかで、つまり最後までたがいの差異を解消しないまま、それでも最後はこれ以外にはないという一つのところへもってゆく……という動き方をしようとする。これを言いかえると、いま何が必要か、それを自分の「やりたい」ことのほうからではなく、他者からの呼び求めに応じて考え、そして動くということである。

このことが、逆説的にもひとを受け身でなくす。「これ、わたしの所轄ではありませぬ」というのではなく、「これ、わたしやるときましようか」という感覚である。ここでは他者に認められる、他者の意識の宛て先に自分がついているという感覚が、ひとを突き動かす一つの支えとなっている。

V

(鷺田清一『わかりやすいはわかりにくい』による)

問一 空欄

A

に入る言葉として最も適切なものを本文中より三字で抜き出せ。

問二 傍線 a「多くのひとが、自分のこの鬱ぎを説明してくれる「物語」があればすぐにそれに飛びつく」とあるが、なぜ多くのひとが「物語」に飛びつくのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 自分自身の課題として取り組むためには「物語」が必要だから。
- 2 「うつ病」と「鬱な気分」とを混同しているため安心できないから。
- 3 外的な要因があれば、ただの鬱気分だと言われても納得できるから。
- 4 責任を引き受けることから逃げてすぐに少しでも楽になりたいから。
- 5 鬱いだ状況から抜け出すために自分の考え方や生き方を変えたいから。

問三 空欄 B と空欄 C には同じ表現が入る。入る表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 責任の所在を明らかにする
- 2 みずから解決のために奔走する
- 3 みずからの苛立ちを抑えて我慢する
- 4 システム自体の問題を明らかにする
- 5 サービスを提供する側の事情を理解する

問四 空欄 D に入る表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 遺憾に思います
- 2 先生の教え方が悪い
- 3 すぐに答えを出したい
- 4 悪いのはわたしではない
- 5 意図して行つたわけではない

問五 傍線b「責任」というこの言葉、英語ではリスボンシビリティ (responsibility) である。この語には、日本語の「責任」という言葉からは感じられない独特の含意がある」とあるが、その「独特の含意」とは無関係なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 組織の一員として、義務を喜んで掴みとること。
- 2 何者かからの召喚にすぐに応じる用意があること。
- 3 他者からの呼び求めに応じて考え、自ら行動すること。
- 4 他ならぬこの私が神に呼びだされ、うながしに応えること。
- 5 何かに突き動かされ、震災後にヴォランティアに赴くこと。

問六 傍線c「他とは違うこの〈顔〉として認められ」とあるが、人の認められ方としてこれと対比されるものを本文中より五字で抜き出せ。

問七 本文中からは次の一文が脱落している。入るべき箇所は、本文中の **I**、**V** のどこか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

ここでは、この自分という意識が、他ならぬこの自分という意識というかたちで、方向を誤って、他者の否定につながってしまっている。

- | | | | | | | | | | |
|---|----------|---|-----------|---|------------|---|-----------|---|----------|
| 1 | I | 2 | II | 3 | III | 4 | IV | 5 | V |
|---|----------|---|-----------|---|------------|---|-----------|---|----------|

問八 傍線 d「逆説的」とあるが、何がどのように逆説的であるかの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 他者からの呼びかけに応えることによって、逆に能動的に動くことになっている。
- 2 したいことをすることによって、逆に真の意味での幸福に値するものになっている。
- 3 最後までたがいの差異を解消しないことによって、逆に一つの目標に到達している。
- 4 いやいや責任を引き受けることによって、逆に喜んで責任を握みとることになっている。
- 5 自分以外の審判に自分をゆだねないことによって、逆に自分を超えた規範に従うことになっている。

問九 傍線 e「他者の意識の宛て先に自分がなっているという感覚」とあるが、それはどのような感覚か。本文に即して三十字以内(句読点を含む)で説明せよ。

(二) 次の山之口貌に関する文章を読み、後の問に答えよ。本文は作者の用語表現法を尊重した。

空襲もはげしくなってきた、あかんぼうを育てながらの東京生活は危険きわまりないものになってきたので、昭和十九年の暮れ、妻の実家のあった茨城県結城郡飯沼村（ゆうぎ いいぬま）の安田家へ疎開しました。

おばあさんは背中にくりつけられたあかんぼうを見て、

「どれどれ、このやろ、またのかこのやろ」

といつてよろこびました。この地方ではなんでも「やろう」を下につけて呼び、ネズミもネコも、「ネズミやろう」「ネコやろう」となるのでした。

貌さん一家は、安田疎開、安田疎開と呼びすてにされましたが、そうしたなかでも、泉はすすくと大きくなり、この地方のことばを習いおぼえて、貌さんに向かって、

「コノヤロ、バカヤロ」

などという、はつらつとした女の子に育っていました。泉という自分の名まえは発音しにくかったのでしょう、なまって「ミミコ」「ミミコ」といったので、いつしかそれが本名になりました。貌さんは、むすめのミミコをテーマに、たくさんのほほえましい、忘れがたい詩を書き残しました。

ミミコの独立

とうちゃんの下駄なんか

はくんじゃないぞ

ぼくはその場を見て言ったが

とうちゃんのなんか

はかないよ

とうちゃんのかんこをかりてつて

ミミコのかんこ

はくんだ と言うのだ

こんな理屈をこねてみせながら

ミミコは小さなそのあんよで

まな板みたいな下駄をひきずって行つた

土間では片隅の

かますの上に

赤い鼻緒はなおの

赤いかんこが

かぼちゃと並んで待っていた

貌さんは二時間もかかって、常磐線にゆられて、そのころの職場だった、上野職業安定所に通勤しました。終戦になって、昭和二十三年まで、疎開先にいましたが、やがて一家は上京し、練馬区貫井町ぬくいの月田家の六じよう一間を借りて、戦後の生活を始めることになったのでした。

その女主人、月田寛かんは、日本女子大の家政学の教授でした。はじめ二、三か月の約束で借りたのですが、ついついそのまま亡くなる日まで十五年間もいつくことになりました。家賃もはらったり、はらえなかったりの歲月でしたが、月田家では、こころよく置いてくれました。

戦後の、住まいをめぐる争いは殺気だつていて、あちらでもこちらでも、約束がちがうと裁判になったり、A のうず
でした。そうしたなかで、月田家と獺さんのような例は、ごくまれだったといつていいでしょう。

月田家の人々もえらかったのですが、それというのも獺さん一家のなかに、そうしてあげずにはいられない人柄の魅力があつたからでしょう。

ぼすとんばつぐ

ぼすとんばつぐを

ぶらさげているので

ミミコはふしぎな顔をしていたが

いつものように

手を振った

いつてらっしゃいと

手を振った

ぼくもまたいつものように

いつてまいるまあすとふりかえつたが

まもなく質屋の

門をくぐつたのだ

戦後になつても獺さんの貧乏はあい変わらずでした。十年近く勤めた職業安定所で、主事補にまでなつたのですが、たまたま

そのころ、人員整理があり、成績の悪い者からクビにされることになりました。ちょうど半年ほど病気で休んでいた獺さんは、自分から辞表をだしてさっさとやめてしまいました。

戦後のインフレ時代、文筆一本で立とうと決心した獺さんの暮らしは、なみたいではなかったでしょう。

「深夜」という詩では、質屋のおやじに「**B**」とつきかえされて、大ふろしきをもつて帰るところで目がさめて、夢だったか……とふとみると、ふろしきからころげたばかりのように、かたわらに妻と子が眠っていた——という切迫した状況を書いています。

生活の苦勞を一手にひきうけたのは、静江夫人でした。獺さんの詩のなかで、静江夫人は「お金が、お金が」と泣いたり、世間の常識を代表して喰ってかかったり、「いつまで経っても意気地なしの文なしじゃないか」とらんぼうなことを発する奥さんと、できてきます。

獺さんは自分のことをまんがのように戯画化しないではいられなかったように、夫人のことも戯画化してしまっているのです。**X**

戦後、ジャーナリズムやマスコミが発達して、貧乏詩人の獺さんは、だんだん有名になり、「貧乏物語」の専門家のようになっていました。NHKの大みそかの深夜番組に、獺さんは、よくひっぱりだされ、いずれおとらぬつわものたち——金子光晴や草野心平などと「貧乏」について語る常連になりました。

静江夫人もまた、新聞記者やアナウンサーから、「逃げだしたいと思われたことは何度かあったでしょうね？」と質問されることが多くなりました。

「ええ」と答えると、「獺夫人が逃げだしたいと思つたことは、獺さんの推敲イの数ほどあるそうだ」ということになりました。推敲の数というと、何千回、何万回ということになるわけです。

静江夫人は、またある人に「逃げだしたいと思つたことは一度もありませんでした」と語っています。どちらが真実だったのでしょうか。

世の常の男たちとまるつきりちがった、夫としての獏さんに、情けなさ、じれったさを感じて「逃げだしてやれ」とつぶやいて、自分の心を発散させ、解放させたことはかぎりなくあつたけれど、じつさいに荷物をまとめて、子どもの手をひいて実家に逃げようと決意したことはたつたの一度もなかったというのが、真実だったのではないのでしょうか。

「貧乏はしましたけれど、わたくしたちの生活にすきんだものはありませんでした。ともかく詩がありましたから……」

このことばをわたくしはとても美しいと思います。こまつた夫よ、と思う反面、子どものような童心を失わずに詩を書きつけてゆく、獏さんの長所を、ちゃんと視て、ソいとげた、すこやかさがにおっています。

思えば見合いのとき、獏さんのことばにつられて「はい」と承諾したものの、校長先生のむすめであった静江夫人は、新婚そうそうからびっくりギョウテン、やがて大波小波となつて一日の休みもなく打ちよせる貧乏をくぐりぬけ、くぐりぬけ、生活の実体をともなつた、ずつしりと重い「C」に変えてゆくための、血みどろのたたかひをつづけたのでした。

ときには夫にくつてかかり、辛辣なことばをはきながらも、巢がひっくりかえらないよう、心をくばり、しつかりとミミコを育ててくれた静江夫人がいたからこそ、獏さんは、獏さんらしく生きられたといえましょう。

(茨木のり子『茨木のり子集 言の葉』による)

問一 傍線口、ハのカタカナを漢字で記せ。

問二 傍線イ、ニの読み方をひらがなで記せ。

問三 空欄 A に入る最も適切な表現を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 うらみつらみ
- 2 ねたみそねみ
- 3 ぐちりおとし
- 4 いみきらい
- 5 なきわらい

問四 空欄 B に入る最も適切な表現を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 うれないげんこうは
- 2 ほんはふるほんやに
- 3 いきものだけはこまる
- 4 おくさんのよめいりどうくはどうも
- 5 しずえさんとミミちゃんをなかせるのはどうも

問五 空欄 X に入る最も適切な一文を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 詩をくつきりとおもしろいものにするための、いわば薬味のような役割を、奥さんは受けもたされたわけなのです。
- 2 詩の中で奥さんを世のふつうの女のひととして印象づけて、読むひとに安心感をあたえようとしたわけなのです。
- 3 詩は、みじかい表現でしんせんな感動をあたえる技法がたいせつで、そのためにことさら貧乏を強調したのです。
- 4 詩というものは、まんがににているため、ほんとうの姿とはちがう夫婦をあえて作者はえがくことにしたのです。
- 5 詩という、感性をだいじにする表現形式に、貌さんたちのすさまじい「貧乏」はうまくフィットしなかつたのです。

問六 空欄 C に入る最も適切な表現を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 ええ
- 2 コノヤロ
- 3 はい
- 4 ものがたり
- 5 ぼすとんばづく

(三)

次の文章を読み、後の問に答えよ。

なほうち過ぐるほどに、ある木陰に石を高く積みあげて、目に立つさまなる塚あり。人に尋ぬれば、「梶原が墓」となん答ふ。

道のかたはらの土となりけりと見ゆるにも、顕基 あきものちゆうなじん 中納言の口ずさみ給へりけん、「年々としとしに春の草の生ひたり」といへる詩、思

ひ出でられて、これもまた古き塚となりなば名だにも残らじと哀れなり。羊太傅やうたいふが跡にはあらねども、心ある旅人はここにも涙

をや落す A。かの梶原は、將軍二代の恩にほこり、武勇ぶゆうさんりやく三略の名を得たり、かたはらに人なくぞ見えける。いかなる

ことかありけん、かたへの憤り深くして、忽ち たちまに身を滅ぼすべきになりければ、ひとまでも延びんとや思ひけん、都の方へ

馳せ上りけるほどに、駿河国吉川 するがのくにきかはといふ所にて討たれにけりと聞きしが、さはここにてありけりと哀れに思ひ合せらる。

讃岐の法皇配所 さぬきのほうしよへおもむかせ給ひて、かの志度しどといふ所にてかくれさせおはしましにける御跡を、西行修行のついでに見ま

らせて、「よしや君むかしの玉の床A とことてもかからんのちは何にかはせん」と詠めりけるなど承るに、まして下さまの者のことは申

すに及ばねども、さしあたりて見るには、いと哀れに覚ゆ。

あはれにも空にうかれし玉銚B たままぼこの道の辺C へにしも名をとどめけり

(『東関紀行』による)

〔注〕

梶原…梶原景時とその一族。景時は鎌倉幕府の重臣であつたが、正治二年(一二〇〇)に追討され駿河国狐崎きつねがさきで子の影季とともに敗死。

顕基…源顕基。三十七歳で出家し隠者生活に入った風流人。永承二年(一〇四七)四十八歳で没。

「年々に春の草の生ひたり」…『白氏文集』中の「古墓何代ノ人、姓ト名トヲ知ラズ、化シテ路傍ノ土トナリ、年々春草ヲ生ズ」による。「道のかたはらの土となり」もこれによる。顕基がこの詩を口ずさんでいたことは諸書に見える。

羊太傅…晋の人、羊祜。『晋書』によれば、人徳により敬愛され、死後岷山に碑が建てられたが、それを見て皆が涙をこぼしたので、堕涙碑と称されたという。

將軍二代…源頼朝と源頼家。

武勇三略…武勇にも優れ、戦略にも秀でていたこと。『三略』は『六韜』と並び称される兵法書。

法皇…崇徳院。保元の乱に敗れて讃岐国に配流され、その地で悶死した。その後、怨霊と化したとされる。

修行…諸国を托鉢しながら巡り歩くこと。

玉の床…天子の御座所。

玉鉾…「道」にかかる枕詞。

問一 空欄

A

の中に、「らむ」を活用させて、入れよ。

問二 傍線a「かたへ」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 片方
- 2 敵方
- 3 仲間
- 4 將軍
- 5 部下

問三 傍線b「ひとまじも延びんとも思ひけん」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 なにはともあれ遠くへ逃げようと思ったのだろうか。
- 2 人のいない隙にいなくなるうと思ったのだろうか。
- 3 人との約束も延期しようと思ったのだろうか。
- 4 知り合いを訪ねて生き延びようと思ったのだろうか。
- 5 いっときだけでも隠れようと思ったのだろうか。

問四 傍線c「見まゐらせて」は誰の行為にどのような敬語表現を用いて、誰に対する敬意を表しているのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 作者の行為に謙讓表現を用い、法皇に対する敬意を表している。
- 2 作者の行為に謙讓表現を用い、西行に対する敬意を表している。
- 3 西行の行為に謙讓表現を用い、法皇に対する敬意を表している。
- 4 西行の行為に尊敬表現を用い、西行に対する敬意を表している。
- 5 法皇の行為に尊敬表現を用い、法皇に対する敬意を表している。

問五 傍線 d「かからんのは何にかはせん」は、つまるところどういふことを言わんとしているのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 お怨みをお晴らしくください。
- 2 成仏なさってください。
- 3 魔界へいらつしやってください。
- 4 お生き返りください。
- 5 むかしの玉座にお戻りください。

問六 傍線 e「まして下さまの者のことは申すに及ばねども」とあるが、「下さまの者」の何が「申すに及ば」ないのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 いやしさ
- 2 あさましさ
- 3 はかなさ
- 4 はずかしさ
- 5 みじめさ

問七 傍線 f「さしあたりて見るに」とは、何を「見る」のか。本文中より五字以内で抜き出せ。

問八 点線 A「玉の床」の「玉」と点線 B「玉銚」の「玉」に共通する掛け詞は何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 珠
- 2 賜
- 3 偶
- 4 魂
- 5 給

問九 文中にある「よしや君……」の歌も収載されている歌集を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 拾玉集
- 2 山家集
- 3 金槐和歌集
- 4 散木奇歌集
- 5 閑吟集